

暮らしの「場」を重ねる 二世帯同居とエネルギー 消費の関係 調査報告書



旭化成ホームズ株式会社
暮らしノベーション研究所

■はじめに

1. 背景

1) 資源枯渇・気候変動などからの省エネルギーの社会的要請

- ・日本のみならずエネルギーの供給については、様々な不確定要因が多く、今後の省エネルギーは社会的にも必ず実行していかなくてはならない課題です。

2) 家庭の省エネルギーとジレンマ

- ・しかし、省エネルギーに対する技術的進歩が日々なされているにもかかわらず、家庭のエネルギー消費は必ずしも減少しているとは言えません。身の回りにある機器の高効率化に伴い、利用方法も変化する、所有数が増える等、私たちの暮らし方も変化し、なかなか全体としてのエネルギー消費が減少しないジレンマにおちいつています。

3) 節約・我慢の効果と限界の先にあるもの

- ・省エネルギーの社会的要請と進まない家庭のエネルギー削減のはざまにいる私たち。しかし、私たちの節約や我慢の効果にも限界が来るかも知れません。それでは私たちはどうすればよいのでしょうか。

2. 暮らしの「場」を重ねるというテーマの目的

■「快適性と省エネの両立」を、「豊かな暮らしと省エネの両立」へ

- ・これらのジレンマを解消していくためには、私たち日本人も暮らしの価値観、豊かさとは何かを見直すことが必要なのではないでしょうか。
- ・近年、日本の住宅においては、一定の温熱環境や光環境を求める快適性が追求されてきました。しかし、日本人としての心地よさ、豊かさは、自然のうつりかわりと切り離された一定環境の空間に本当に存在するのでしょうか。
- ・私たちは、自然のうつりかわりや変化からもたらされる心地よさを住まいに取り入れ、家族が共に暮らすという幸せを追求することにより、豊かさとエネルギー消費の削減が両立すると信じています。暮らしの「場」を重ねるというテーマは、その中から生まれてきました。
- ・二世帯住宅について言えば、両世帯がその暮らしの価値観を大切にしながら自然に交流し、過ごすことのできる住まいは、良好な家族関係を築くとともに、生活エネルギー消費の削減にもつながると考えます。
- ・今回は二世帯同居家族に焦点をあて、その暮らしの「場」を重ねる住まい方とエネルギー消費の関係についてご報告します。

2013年1月
旭化成ホームズ株式会社 くらしノベーション研究所

INDEX

■ I. 暮らしの「場」を重ねる住まい方と エネルギー消費の関係

1. 暮らしの「場」を重ねること 3
2. これまでの調査でわかったこと 3
3. 今回の調査について 4

■ II. 二世帯同居家族と単世帯別居家族のエネルギー消費量比較

1. 二世帯同居家族は省エネルギー？（単世帯別居家族との年間エネルギー消費量比較） 6
2. 二世帯住宅のエネルギー消費が小さくなる理由は何でしょうか？ 8

■ III. 親子同居家族の「場」の重なりの実態

1. 食事の「場」の重なりの実態 10
2. 入浴の「場」の重なりの実態 12

■ IV. 親子同居のタイプとエネルギー消費の関係

1. 親子同居タイプ別エネルギー消費量 13
2. 玄関・キッチン・浴室パターン別エネルギー消費量 13

■ V. 親子同居家族の「場」の重なりとエネルギー消費の関係

1. 平日の夕食場所とエネルギー消費量の関係 14
2. 平日の夕食のとり方（空間と時間を重ねる）とエネルギー消費量の関係 14
3. 平日の入浴場所とエネルギー消費量の関係 15
4. 親子同居家族のエネルギー消費に影響を及ぼす要因 15

■ VI. 息子・娘夫婦同居家族の「場」の重なりの実態

1. 旭化成の二世帯住宅と息子夫婦・娘夫婦同居 16
2. 息子・娘夫婦同居家族の「場」の重なり 17

■ VII. 二世帯同居家族の「場」の重なりとライフステージ変化

1. 二世帯同居家族の食事場所に見るライフステージ変化の可能性 20
2. 二世帯同居家族のライフステージ変化を受け入れる「場」を有する二世帯住宅 22
3. 二世帯同居家族の暮らし「独立と融合の程良いバランス」のための空間要件 23

■ VIII. まとめ

1. 二世帯同居家族は年間に2～3割のエネルギー消費が削減される 24
2. 親子同居家族のエネルギー消費量は「場」の重なりで減少 24
3. 二世帯同居家族のライフステージ変化を受け入れる「場」を有する二世帯住宅 25

■ IX. 参考

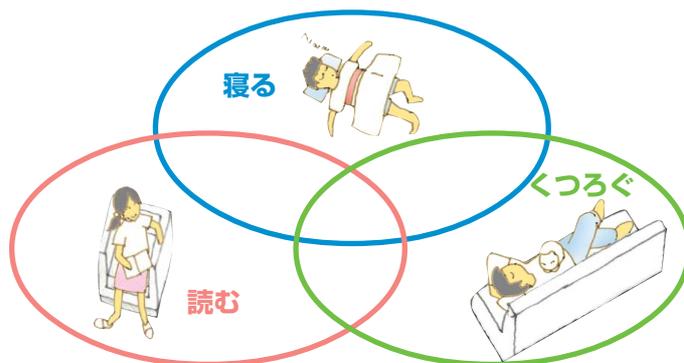
1. 2007年単世帯調査の概要 26
2. 2012年単世帯調査の概要 27

■ I . 暮らしの「場」を重ねる住まい方とエネルギー消費の関係

1. 暮らしの「場」を重ねるとのこと

・私たちは暮らしの「場」を、時間や空間の概念を持つ**行為の領域**と考えています。暮らしの「場」を重ねるとは、「時間や空間を共にする」ことで、その際に行われる行為は必ずしも同じではありません。

・例えば、リビングで家族が一緒にお茶を飲みながらおしゃべりをするような「場」の重ね方もありますが、リビングで本を読む人、勉強する人、うたた寝する人がそれぞれ過ごすような、時間の共有としての「場」の重ね方もあります。また、家族がそれぞれ別々の時間にリビングに来てくつろぐような、空間の共有としての「場」の重ね方もあります。



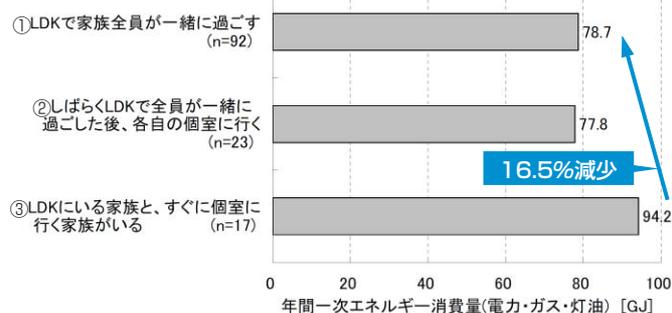
2. これまでの調査でわかったこと

■ 2008年 単世帯調査「家族の「場」を重ねる住まい方とエネルギー消費の関係」概要

・2008年に、家族の「場」を重ねる代表的なシーンとして夕食後の過ごし方を取り上げ、単世帯家族の夕食後の住まい方と環境・省エネ行動、エネルギー消費量、住宅プラン（LDK）の比較を行いました。その結果、以下のことが分かりました。

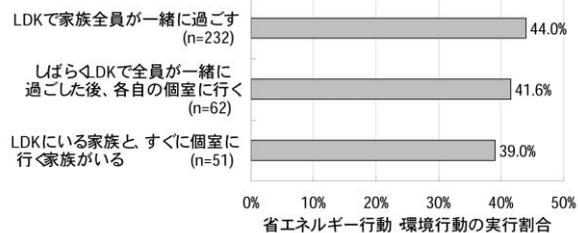
1) 「場」を重ねる家族は、 年間エネルギー消費量が少ない。

◆ 夕食後の過ごし方別年間一次エネルギー消費量平均



2) 「場」を重ねる家族は、 省エネルギー行動が多い。

◆ 夕食後の家族の過ごし方別の省エネルギー行動・環境行動の実行割合（平均）



3) 家族がライフステージを経て「場」を重ねるための4つのLDK空間要件の提案

- ・家族人数に対して必要十分なLDK面積（個室面積よりもLDK面積を重視）
- ・オープンなLDK（オープンキッチン・リビング吹抜けやリビング階段など）
- ・LDKに機能コーナー（デスクコーナー・家事コーナー・子どもコーナーなど）
- ・LDK内に見える場・隠れる場を配置（続き間やコーナーなどでつくる、お互いが見える場・見えない場）



3. 今回の調査について

1) 調査の目的

- ・親子同居家族の住宅・住まい方・エネルギー消費の関係を調査することにより、その特徴を明らかにします。
- ・本調査では、親と子夫婦が同居する家族を「親子同居家族」、そのうちキッチン（ミニキッチンを含む）が2つ以上の二世帯住宅に住む家族を「二世帯同居家族」と定義して使用します。



2) 調査対象

- ・関東圏、中部圏、関西圏のヘーベルハウス居住者
- ・親子同居家族（二世帯同居家族、一体型同居家族を共に含む）
- ・築1～11年

3) 調査時期

- ・第1回：2012年1～2月
- ・第2回：2012年9～10月

4) 調査方法

- ・Web調査と郵送調査を併用

5) 有効回答

- ・全体：693件（有効回答率 8.4%）
- ・エネルギー使用量のデータがあるもの：482件

6) 回答者属性

回答数 n = 693

居住地域	関東圏：69.8% 中部圏：8.8% 関西圏：21.4%	
年代	親世帯夫	60代以下：22.5% 70代：28.1% 80代以上：14.0% 同居していない：35.3%
	親世帯妻	60代以下：39.3% 70代：35.3% 80代以上：19.2% 同居していない：6.2%
	子世帯夫	30代以下：27.6% 40代：43.5% 50代以上：27.6% 同居していない：1.3%
	子世帯妻	30代以下：36.0% 40代：44.4% 50代以上：19.5% 同居していない：0.1%
同居家族人数	平均5.4人	
子世帯の長子学齢	未就学児：16.1% 小学生：28.4% 中高生：24.4% 大学生以上：20.0% 同居していない：11.0%	
住宅延面積	平均164.1㎡	
断熱仕様	新省エネ基準相当：28.1% 次世代省エネ基準相当：71.9%	

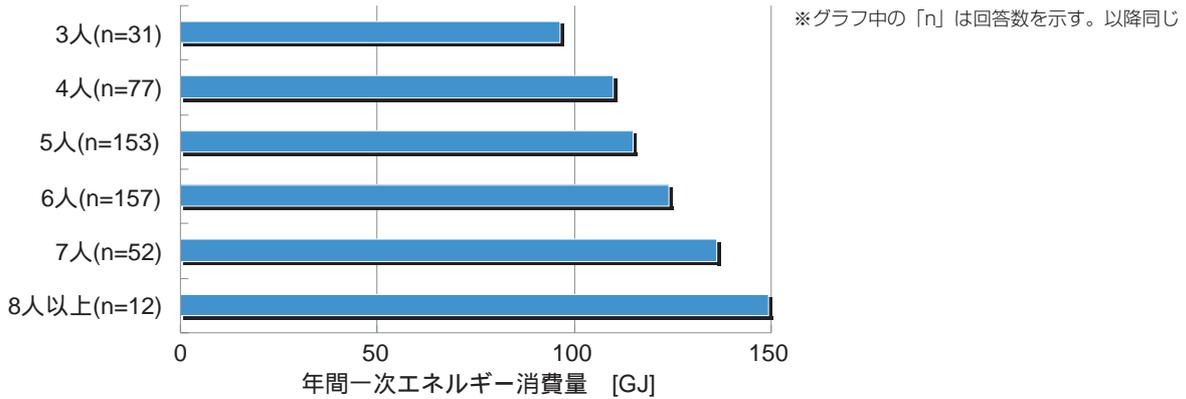
7) 親子同居家族のエネルギー消費特性

①同居家族人数

・単世帯家族と同様、同居家族人数が多くなるとエネルギー消費量は増加する傾向が見られました。

◆同居家族人数とエネルギー消費量

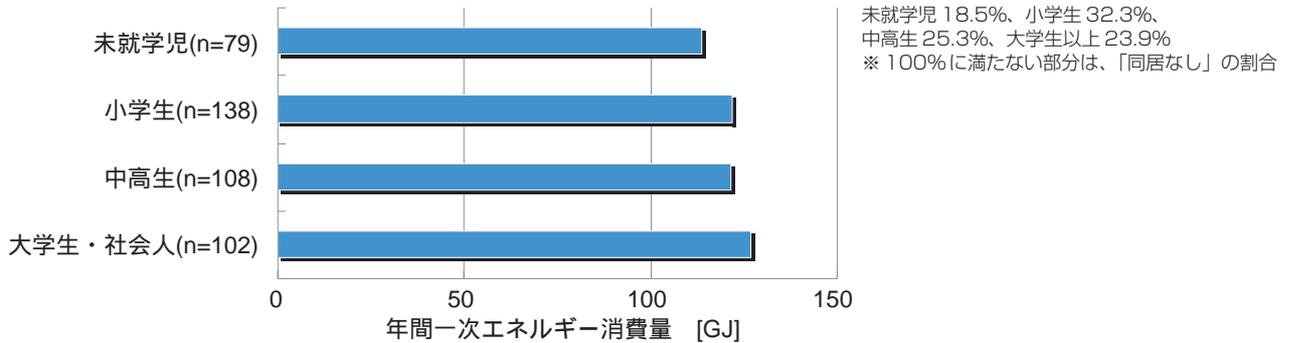
平均 5.3 人



②子世帯の長子学齢

・長子学齢と共にエネルギー消費量は増加する傾向があるが、その差は小さく有意差は見られませんでした。

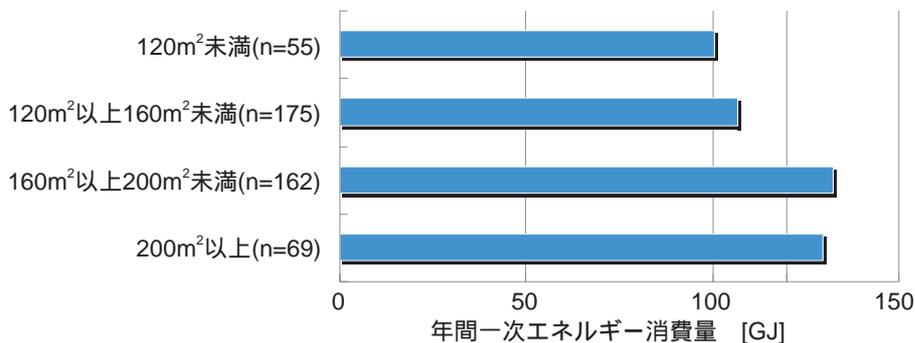
◆長子学齢とエネルギー消費量



③住宅延面積

・単世帯家族と同様、面積が大きくなるとエネルギー消費は増加しました。

◆延面積とエネルギー消費量 平均 171.0 m²



■ II .二世帯同居家族と単世帯別居家族のエネルギー消費量比較

・6人家族が一緒に二世帯住宅に暮らす場合と、2人家族・4人家族が別々に二軒の住宅に暮らす場合のエネルギー消費量を比較すると、二世帯住宅で2～3割少ないことが分かりました。

1. 二世帯同居家族は省エネルギー？（単世帯別居家族との年間エネルギー消費量比較）

※ヘーベルハウス入居者アンケート調査（2007、2012）より

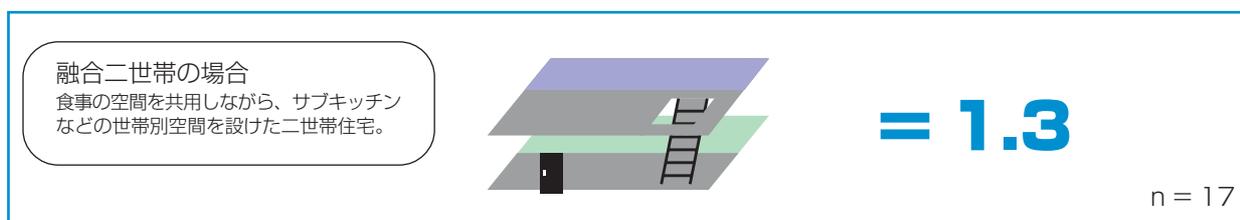
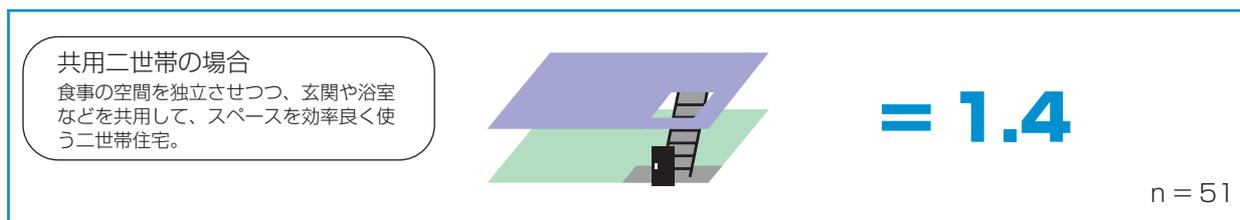
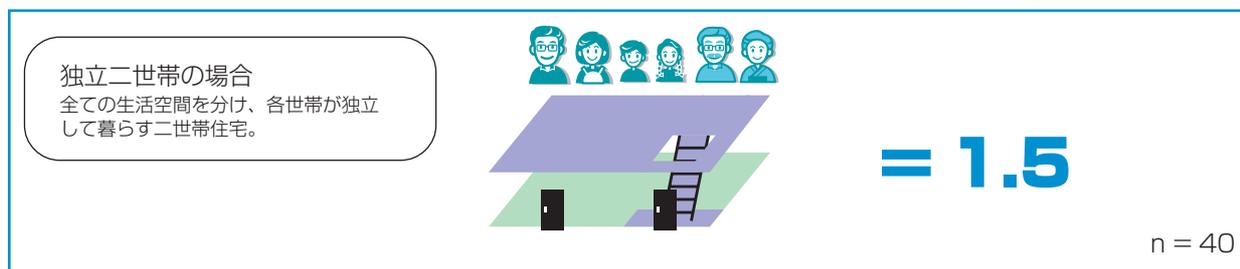
単世帯／4人家族＋2人家族



2～3割減少 ↓

二世帯／6人家族

■ 親世帯 ■ 子世帯 ■ 共用部



※築15～30年の親世帯（2人）の家はそのまま、子世帯（4人）の家を建てた場合との比較を想定。親世帯（2人）・子世帯（4人）ともに新築した場合との比較については、IX. 参考2. 2012年単世帯調査概要をご覧ください。



二世帯住宅が増えると、エネルギー消費削減に？

・単世帯（4人家族と2人家族）が二世帯住宅（独立型）に一軒建て替わると、4.3kW分の太陽光発電システムで発電する発電量と同等のエネルギーを削減することができます。

※一年あたり1000kWh/1kWpの発電量を想定。

《参考：二世帯住宅の 3 つのタイプ『二世帯住宅という選択(平凡社)』》

1) 独立二世帯 (外部行来型 / 内部行来型)

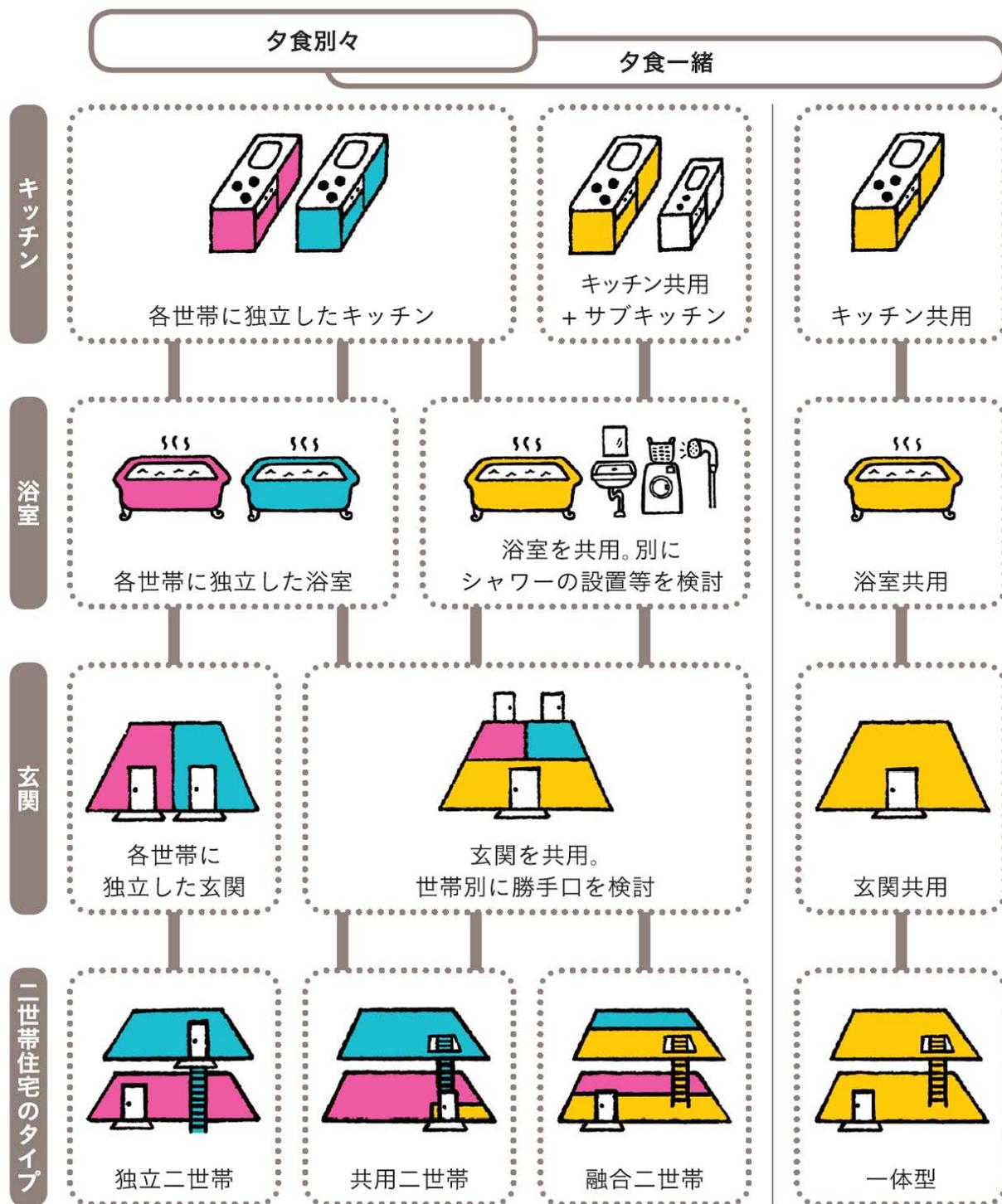
・全ての生活空間を分け、各世帯が独立して暮らす二世帯住宅。

2) 共用二世帯

・食事の空間を独立させつつ、玄関や浴室などを共用して、スペースを効率良く使う二世帯住宅。

3) 融合二世帯

・食事の空間を共用しながら、サブキッチンなどの世帯別空間を設けた二世帯住宅。



2. 二世帯住宅のエネルギー消費が小さくなる理由は何でしょうか？

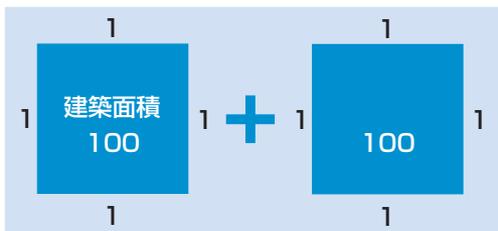
・以下の3つの理由が考えられます。

- 1) 建物が1つになることによる変化
- 2) 床面積減少による変化
- 3) 生活が近づくことによる変化

1) 建物が1つになることによる『熱環境の変化』

・外壁面積、窓面積が減少することで熱損失が減り、省エネルギーになると考えられます。

◆単世帯別居（建物2つ）の例



◆二世帯同居（建物1つ）の例



外壁面積
= 8 : 6



2) 建物の延面積の減少による『照明・冷暖房面積・家電数の減少』

①建物の延面積の合計は二世帯住宅に住むことで減少

単世帯4人家族と2人家族の延面積

二世帯6人家族の延面積

単世帯4人：136.6㎡
単世帯2人：140.6㎡

合計：**277.3㎡**



独立二世帯6人

184.6㎡

②延面積の減少にともない、照明・冷暖房面積・家電数も減少

・親子同居家族においても、建物の延面積が小さいとテレビ・エアコンの所有台数が少ない関係が見られます。

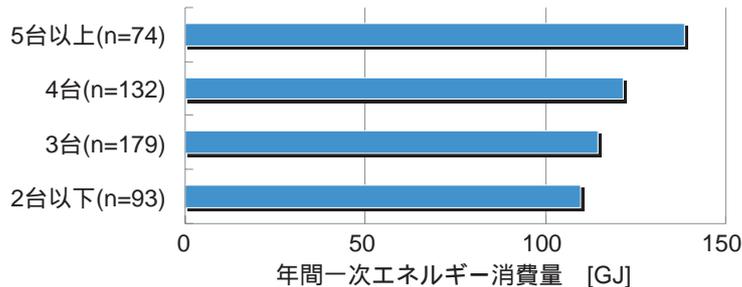
◆建物の延面積とテレビ・エアコン所有台数の関係

延面積	テレビ 	エアコン 
120㎡未満	3.1台	3.7台
120㎡以上160㎡未満	3.2台	4.8台
160㎡以上220㎡未満	3.6台	5.7台
220㎡以上	3.7台	6.6台

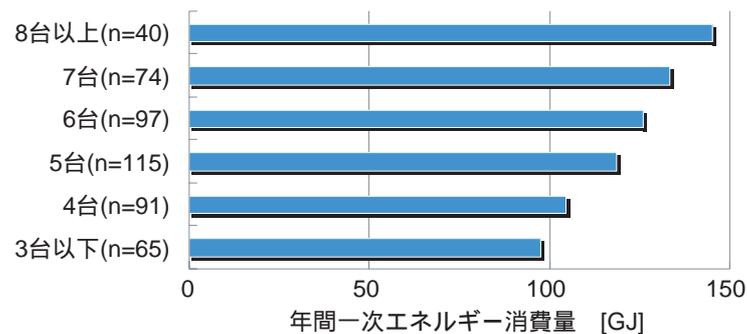
↓ 増加

・エアコン・テレビの所有台数が少ないと、年間一次エネルギー消費量が少ないことが下のグラフより分かります。

◆テレビ所有数とエネルギー消費量



◆エアコン所有数とエネルギー消費量



3) 生活が近づくことによる『住まい方の変化』 ⇒次章以降

■暮らしの「独立と融合の程良いバランス」が生み出す「場」の重なり

・別々の住宅から、一戸の二世帯住宅に住むことにより、家族の生活は近づいていきます。今回調査ではその実態、エネルギー消費量との関係を分析しましたので、次章よりその結果をご報告します。



■ Ⅲ . 親子同居家族の「場」の重なりの実態

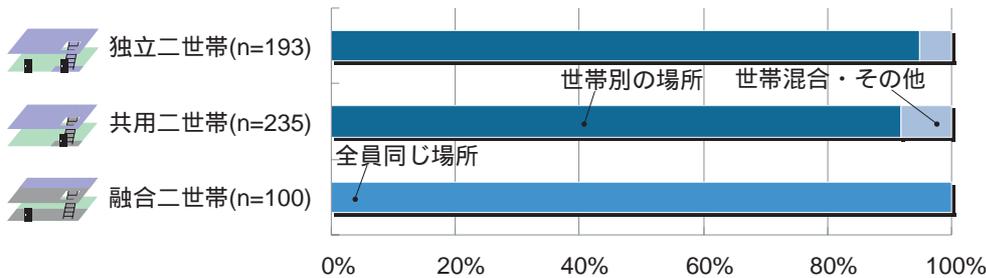
- ・親子同居家族の住まい方は、その玄関・キッチン・浴室数により、食事の「場」の重なりが段階的に変化します。
- ・入浴の「場」の重なりは、食事よりも起きにくい傾向があります。

1. 食事の「場」の重なりの実態

1) 平日の夕食場所の共用

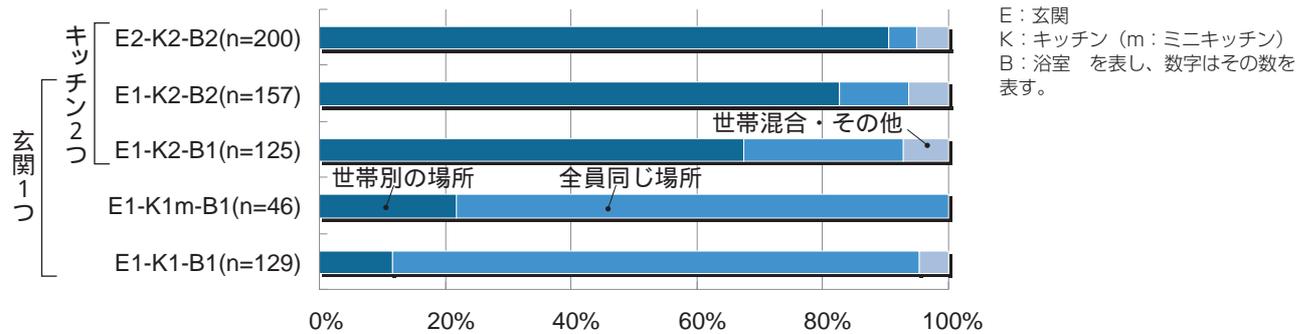
・独立・共用二世帯では、9割が世帯別の場所で食事をしています。

◆二世帯分類別の食事場所比較（建物形態と住まい方による分類）



・キッチンが2つある家族では、7～9割が世帯別の場所で食事していますが、一方で玄関が1つの場合はキッチンが2つあっても全員一緒に食事室を利用する割合が10～25%とやや多くなります。

◆玄関・キッチン・浴室数のパターン別 食事場所比較（建物形態による分類）



■ 世帯別の場所



親世帯・子世帯別に
分かれた場所で食事をとる。

■ 全員同じ場所



親世帯・子世帯が
共に同じ場所で食事をとる。

■ 世帯混合・その他

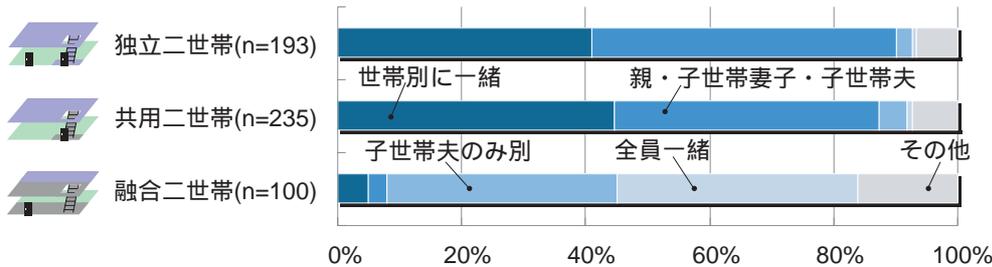


世帯の区別とは関係ない家族が一緒の場所で食事をとる。または平日に家で食事をとらない家族がいる。

2) 平日の夕食のとり方（空間と時間を重ねる）

- ・独立・共用二世帯では、世帯別に一緒にが4割以上。親世帯・子世帯妻子・子世帯夫の3回に分かれる家族も4割以上いました。
- ・一方、融合二世帯では、全員一緒に子世帯夫のみ別がそれぞれ約4割あり、場の共用だけでなく家族の時間の共有もなされている様子がありました。

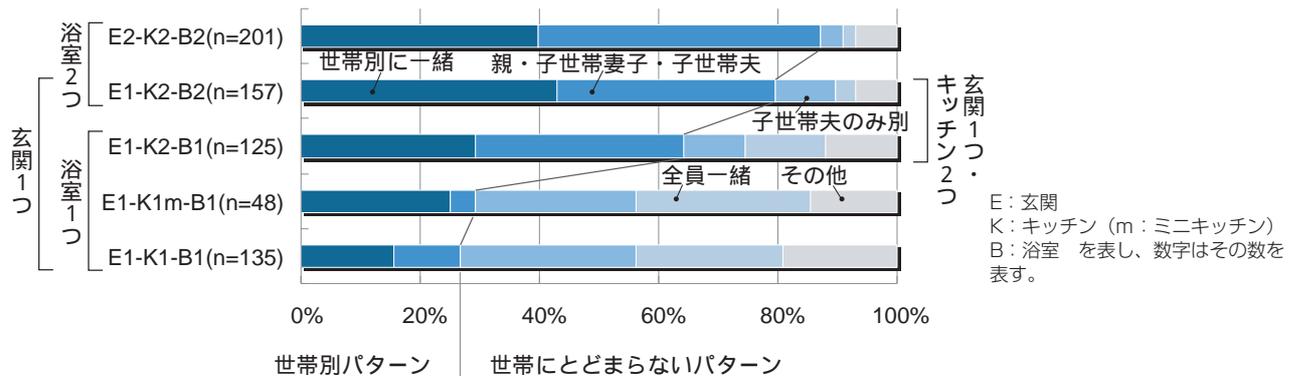
◆二世帯分類別 夕食のとり方比較（平日）



世帯別に一緒に : 親世帯は一緒に、子世帯は一緒にとる
 親・子世帯妻子・子世帯夫 : 親世帯、子世帯妻子、子世帯夫の3回に分かれる
 子世帯夫のみ別 : 親世帯と子世帯妻子は一緒に、子世帯夫は別で2回に分かれる
 全員一緒に : 親世帯、子世帯の全員が一緒にとる

- ・E1-K2（玄関1つ、キッチン2つ）でも、浴室が1つの家族は、全員一緒に食事をするパターンが3.2%から13.6%へとやや増加します。
- ・E1-K1-B1（玄関1つ、キッチン1つ、浴室1つ）の単世帯住宅による同居家族では、その他が19.3%あり、親・子夫婦の世帯別にとどまらない色々な食事パターンが増えることがうかがえます。

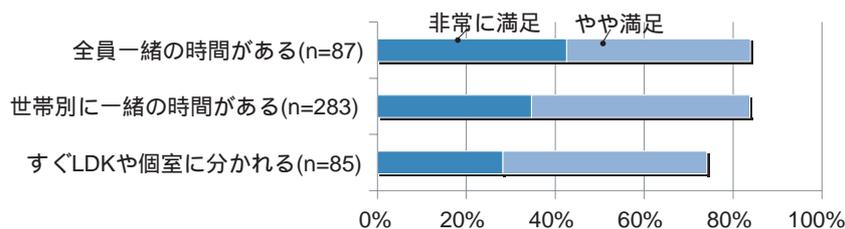
◆玄関・キッチン・浴室数のパターン別 夕食のとり方比較（平日）



みんなが一緒に過ごすことは暮らしの満足度にも関係がありました。

- ・夕食後、一緒に過ごす親子同居家族は、暮らしや家族関係に対する満足度が高くなることがわかりました。一方、平日の夕食をとる食事室が同じであることと満足度には関係が見られませんでした。空間と時間を重ねることが満足度には関係すると言えそうです。

◆夕食後の過ごし方と暮らしや家族関係に対する満足度

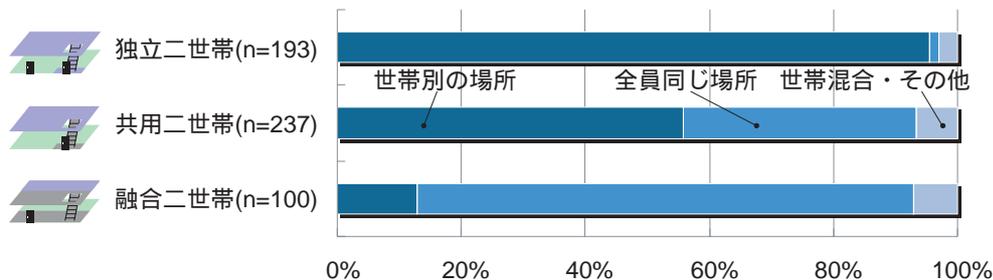


2. 入浴の「場」の重なりの実態

1) 平日の入浴場所の共用

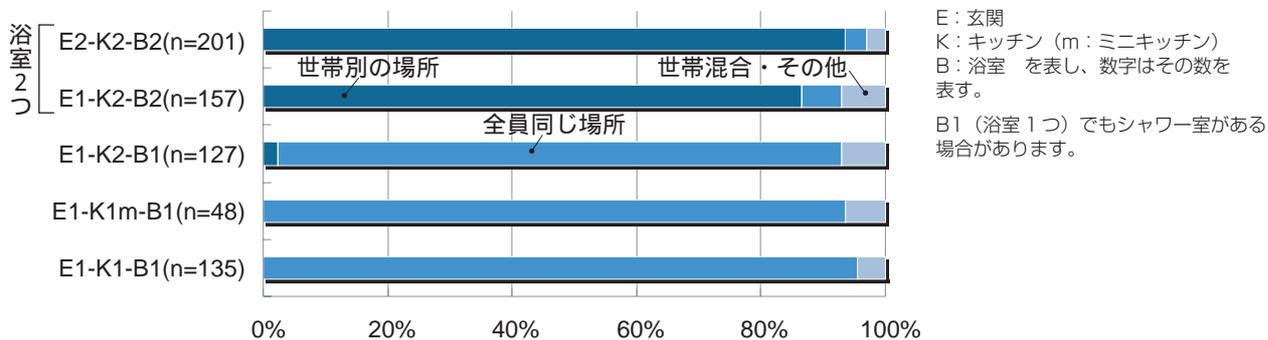
・融合二世帯は食事室を共用していますが、うち13.0%が浴室を世帯別に分けています。

◆二世帯分類別 入浴場所比較



・浴室が2つある家族では浴室の共用が3.5%、6.3%と、ほとんど起きていません。浴室の共用は食事室の共用より起こりにくいと言えそうです。

◆玄関・キッチン・浴室数のパターン別 入浴場所比較



■世帯別の場所



親世帯・子世帯別に
分かれた浴室で入浴する。

■全員同じ場所



親世帯・子世帯が
共に同じ場所に入浴する。

■世帯混合・その他



世帯の区別とは関係ない家族が一緒の浴室で入浴する。
または平日に家で入浴しない家族がいる。

■IV. 親子同居のタイプとエネルギー消費の関係

- 親子同居家族の年間エネルギー消費量は、その玄関・キッチン・浴室のとり方に関係が見られます。キッチンが2つから1つに変わる場合は13.0%の変化があり、浴室の場合は8.3%の変化があることがわかりました。

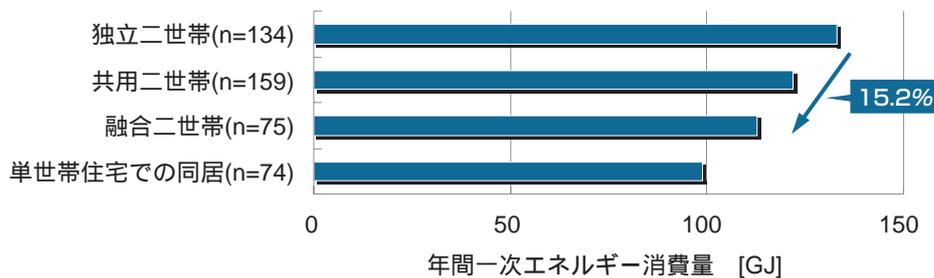
1. 親子同居タイプ別エネルギー消費量

同居タイプ別に年間一次エネルギー消費量を比較すると、下記に示すように融合度が高くなるにつれエネルギー消費量が小さくなる傾向が見られました。融合度が高くなることは、同居家族人数、延面積、暮らしの「場」の重なり、それぞれ影響を及ぼし合い、エネルギー消費に結びついていると考えられます。

◆親子同居タイプ別 エネルギー消費量（親+子夫婦）

	同居タイプ	同居家族人数	建物延面積	年間一次エネルギー消費量
二世帯住宅での同居	独立二世帯	同居 5.5 人	183.0 m ²	133.0GJ
	共用二世帯	同居 5.5 人	158.3 m ²	121.9GJ
	融合二世帯	同居 5.1 人	159.8 m ²	112.8GJ
単世帯住宅での同居（一体型同居）		同居 5.3 人	143.9 m ²	99.0GJ

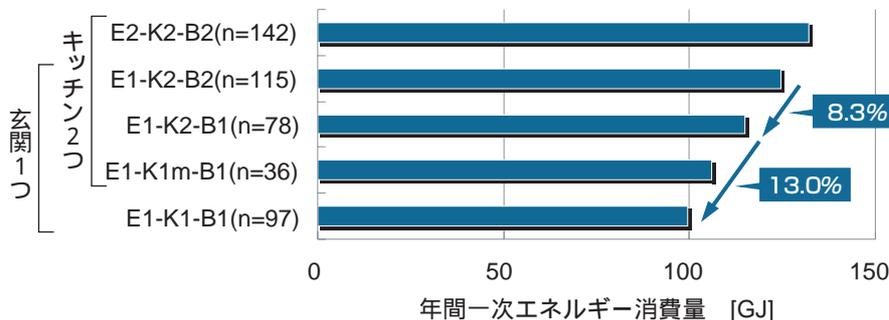
暮らしの融合度高



2. 玄関・キッチン・浴室パターン別エネルギー消費量

- 玄関・キッチン・浴室が2つから1つになることでエネルギー消費は小さくなります。玄関1つになることによるエネルギー消費の変化は玄関自身のエネルギー消費というよりも、食事を始めた生活の融合度が高まることや、ホール・廊下面積が減少することによると考えられます。
- キッチンが2つから1つになることでのエネルギー消費の変化は13.0%になりました（玄関1つ、浴室1つの場合）。浴室が2つから1つになることでの変化は8.3%（玄関1つ、キッチン2つの場合）で、キッチンの方がやや変化が大きいことがわかりました。

◆玄関・キッチン・浴室数のパターン別 エネルギー消費量



E：玄関
K：キッチン（m：ミニキッチン）
B：浴室 を表し、数字はその数を表す。

■ V . 親子同居家族の「場」の重なりとエネルギー消費の関係

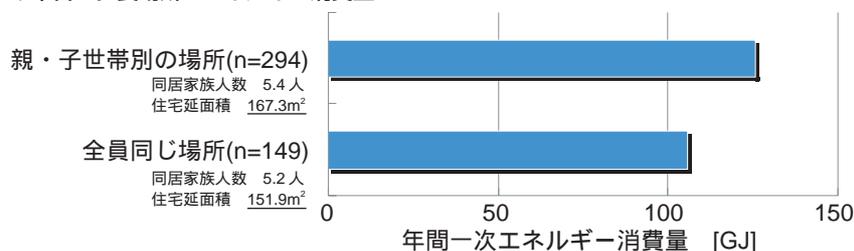
- ・親子同居家族のエネルギー消費には「延面積」「同居家族人数」の他に「環境・省エネ行動の実行」「両世帯の夕食の『場』の重なり」「最も遅い人の就寝時間」が影響します。
- ・一方、「子世帯の長子学齢」や「両世帯の入浴の『場』の重なり」は有意な要因とはなりませんでした。

・前章IV-2では、建物形態とエネルギー消費量に関係が見られました。このV章では、夕食の場所・とり方や入浴の場所に表れる住まい方とエネルギー消費について見ていきます。

1. 平日の夕食場所とエネルギー消費量の関係

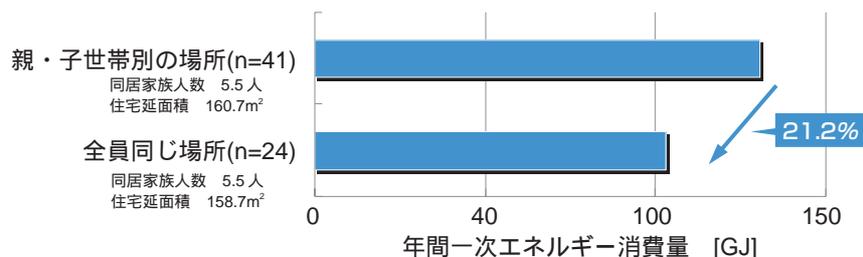
・親・子世帯の平日の夕食場所が異なると、エネルギー消費量も大きくなりますが、同時に、延面積も大きくなります。延面積の影響を小さくする為には、対象者を絞ってみます。

◆平日の夕食場所とエネルギー消費量



・住宅延面積 150 m²以上 170 m²未満・同居家族人数 5～6人の対象者でみても、同じ場所で食事をする家族は、年間一次エネルギー消費量が 21.2% 少なくなりました。食事行為そのものに付随する設備・家電の使用にとどまらず、LDでの過ごし方等、その前後を含めた暮らしの「場」の重なりが増えるためと考えられます。

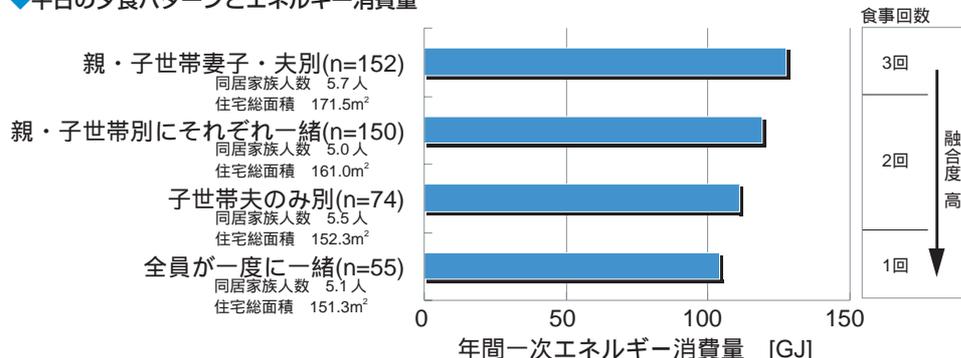
◆平日の夕食場所とエネルギー消費量 (住宅延面積 150 m²以上 170 m²未満・同居家族人数 5～6人)



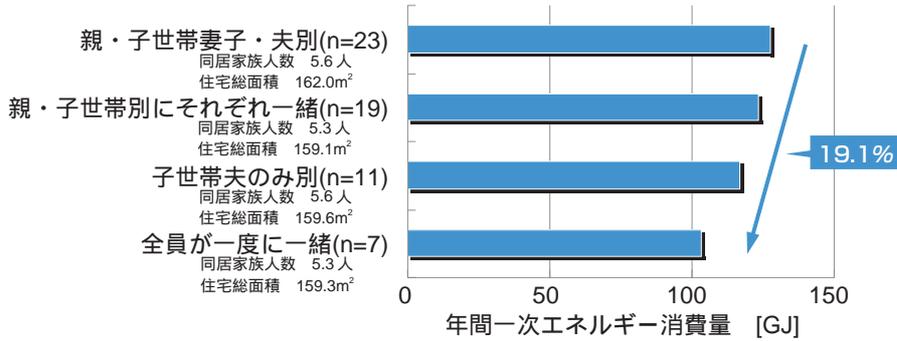
2. 平日の夕食のとり方 (空間と時間を重ねる) とエネルギー消費量の関係

・夕食のとり方でも、回数が少なく融合度が高くなるほど、年間一次エネルギー消費量が少なくなります。

◆平日の夕食パターンとエネルギー消費量



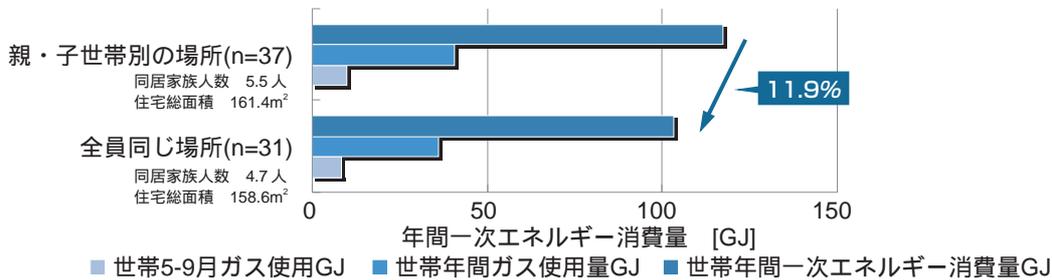
◆ 平日の夕食パターンとエネルギー消費量（住宅延面積 150㎡以上 170㎡未満・同居家族人数 5～6人）



3. 平日の入浴場所とエネルギー消費量の関係

・ 親・子世帯の平日の入浴場所が同じ場合、エネルギー消費も小さくなりますが、食事ほどの違いは見られませんでした。

◆ 平日の入浴場所パターンとエネルギー消費量（住宅延面積 150㎡以上 170㎡未満・ガス併用のみ）



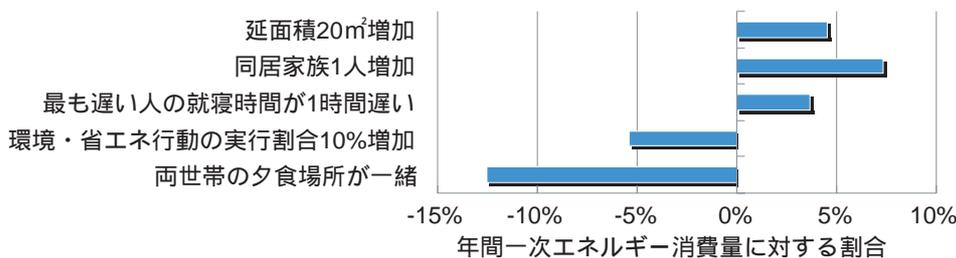
4. 親子同居家族のエネルギー消費に影響を及ぼす要因

- ・ 当研究所による単世帯調査の結果と同様に、住宅延面積、環境・省エネ行動の実行の割合は影響が見られました。
- ・ 親子同居家族は、延面積と共に同居家族人数の影響が見られたこと、長子学齢の影響が見られなかったことが特徴です。また両世帯が夕食場所を一緒にすることは影響しますが、浴室については有意な影響が見られませんでした。

◆ 親子同居家族のエネルギー消費に影響を及ぼす要因（重回帰分析結果より）

分析項目	影響の有無
延面積	+
同居家族人数	+
最も遅い人の就寝時間	+
環境・省エネ行動	-
両世帯の夕食の「場」の重なり	-
子世帯の長子学齢	×
両世帯の入浴の「場」の重なり	×

+ : 増加 - : 減少 × : 有意な影響なし



※環境・省エネ行動は「テレビは主電源で切る」「ゴミは分別する」など45項目について実行している割合。

■ VI. 息子・娘夫婦同居家族の「場」の重なりの実態

- ・2000年以降、娘夫婦との二世帯同居は徐々に増加しています。娘夫婦同居は息子夫婦同居より、玄関・キッチン・浴室の融合傾向があります。子世帯妻の就業状況がフルタイムの場合は、キッチンが2つ以上でも世帯別に平日の夕食場所を分ける割合が小さくなります。
- ・息子夫婦・娘夫婦同居の年間エネルギー消費量に有意な違いは見られませんでした。

1. 旭化成の二世帯住宅と息子夫婦・娘夫婦同居

1) 1975年「二世帯住宅」誕生

1987年「DUO & DUET」を商品化

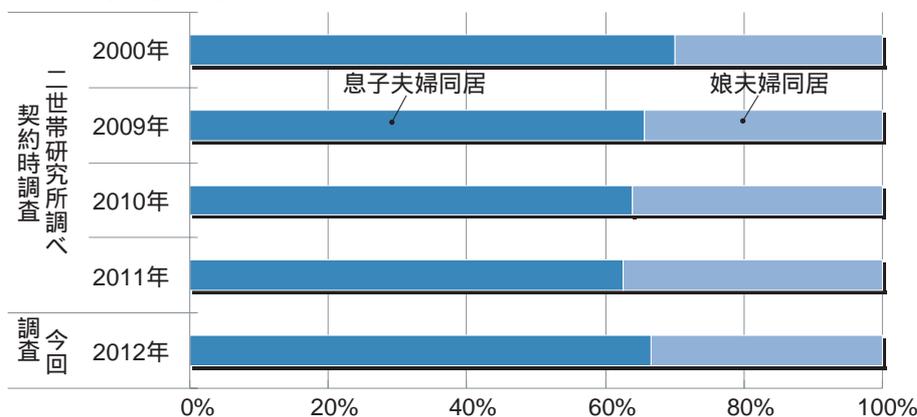
- ・当時一般的であった息子夫婦と住む二世帯住宅に加えて、娘夫婦同居への関心の高まりを背景に、息子夫婦同居 DUO と娘夫婦同居 DUET を提案しました。

- ・息子夫婦同居＝オモテ融合・家事分離
- ・娘夫婦同居＝オモテ分離・家事融合

2) 娘夫婦同居割合の増加（二世帯住宅研究所調べ）

- ・2000年以降、娘夫婦同居の割合が徐々に増加しています。

◆娘夫婦同居割合の変遷



※今回調査は、築1～11年までのヘーベルハウス居住者を対象

- ・そこで、今回、娘夫婦同居（＝オモテ分離・家事融合）に着目し、二世帯同居家族の生活が近づくことによる、暮らしの「場」の重なり方について分析を行いました。
- ・本調査対象において、娘夫婦同居では同居家族人数に違いは見られませんでした。やや延面積は小さく、子世帯妻のフルタイム就業が多いという傾向がありました。

◆本調査の属性表

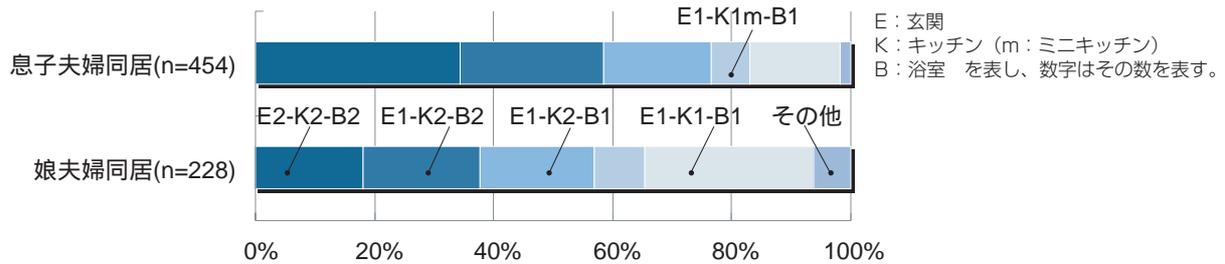
		息子夫婦同居 (n=445)	娘夫婦同居 (n=228)
同居家族人数 (平均)		5.3人	5.4人
住宅延面積 (平均)		167.1m ²	158.3m ²
子世帯夫の年代	30代以下	27.4%	30.0%
	40代	46.6%	39.4%
	50代	26.0%	30.5%
両親・片親同居	両親同居	58.1%	61.0%
	片親同居	41.9%	39.0%
子世帯の長子学齢 (子どもありの世帯のみ)	未就学児	18.0%	18.6%
	小学生	32.3%	31.9%
	中高生	29.0%	23.5%
	大学生・社会人	20.8%	26.0%
子世帯妻の就業形態	フルタイム	18.2%	25.8%
	パート・アルバイト	35.0%	30.9%
	自営・在宅勤務	3.4%	3.7%
	専業主婦	42.3%	36.4%
	リタイア	0.5%	0.0%
	その他	0.7%	3.2%

2. 息子・娘夫婦同居家族の「場」の重なり

1) 息子・娘夫婦同居と玄関・キッチン・浴室数

・息子夫婦同居で最も多かったのがE2-K2-B2（玄関・キッチン・浴室が2つずつ）。娘夫婦同居ではE1-K1-B1（玄関・キッチン・浴室が1つずつ）が多く、娘夫婦同居は息子夫婦同居よりも融合傾向が見られました。

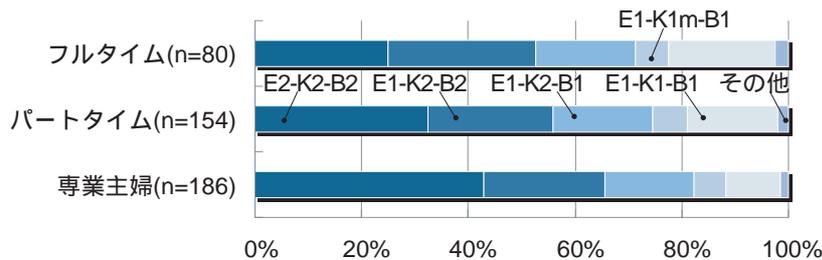
◆息子・娘夫婦同居と玄関・キッチン・浴室数



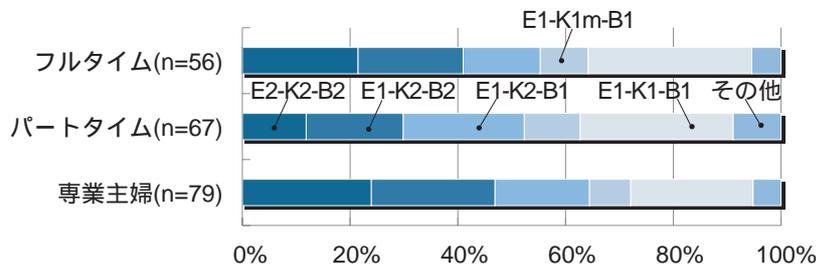
・子世帯妻の就業状況で比べると、息子夫婦同居は、フルタイムに近いほどE1-K1-B1が増加し、E2-K2-B2が減少するという融合傾向が見られます。娘夫婦同居は、フルタイムでE1-K1-B1が増える傾向が見られますが、E2-K2-B2は減りません。フルタイムと専業主婦でE2-K2-B2が多く、パートタイムで少ないという結果でした。

・子世帯妻のフルタイム就業は、平日と休日の生活パターンの違いが大きくなる場合が多いため、空間と生活の分離を状況により使い分けている可能性が考えられます。

◆子世帯妻の就業状況と玄関・キッチン・浴室数（息子夫婦同居）



◆子世帯妻の就業状況と玄関・キッチン・浴室数（娘夫婦同居）



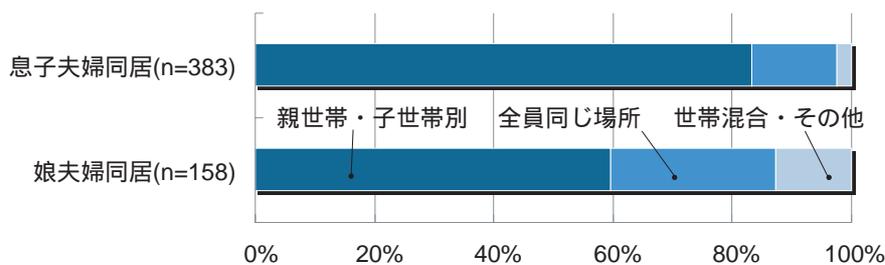
2) 息子・娘夫婦同居と行動（夕食・入浴パターン）

・ 息子夫婦同居・娘夫婦同居の家族で、キッチン・ミニキッチンが2つ以上ある家族の食事場所と食事のとり方を見たところ、息子夫婦同居は娘夫婦同居に比べ、平日の夕食場所を分ける割合が多く、また、娘夫婦同居は「全員同じ場所」「世帯混合・その他（※）」の割合が多くなる傾向にありました。

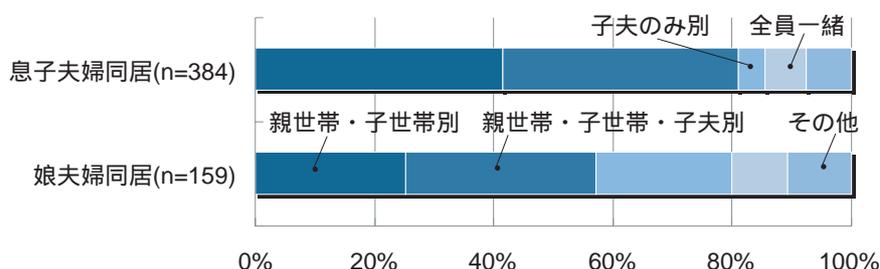
（※）世帯混合・その他の例

・ 親世帯と子世帯の子どもが親世帯ダイニング、子世帯夫婦は子世帯ダイニングで食事をとる。子世帯の子どもと夫または妻は親世帯の浴室を使用する等。

◆ 息子・娘夫婦同居と平日の夕食場所：キッチン・ミニキッチンが2つ以上

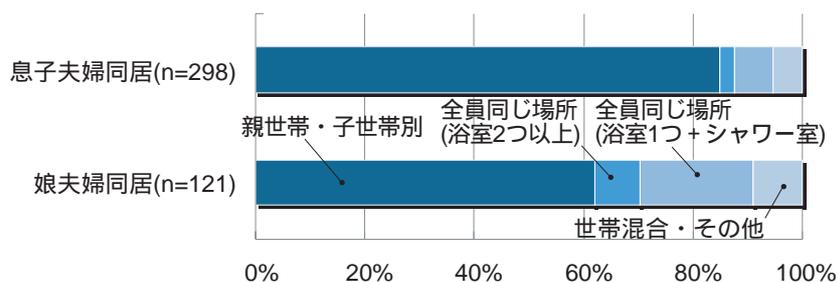


◆ 息子・娘夫婦同居と平日の夕食のとり方（空間・時間を重ねる）：キッチン・ミニキッチンが2つ以上



・ 同様に、息子夫婦同居・娘夫婦同居の家族で、浴室・シャワー室が2つ以上ある家族の入浴場所を見たところ、娘夫婦同居は「全員が同じ場所に入浴する」が3割近くあり、息子夫婦同居に比べて浴室も共用する傾向がありました。しかし、浴室2つ以上ありながらも、全員同じ場所に入浴する家族は、娘夫婦同居でも8.2%と、Ⅲ章で述べたように、浴室の共用は起きにくいことが確認できました。

◆ 息子・娘夫婦同居と入浴場所：浴室とシャワー室が合わせて2つ以上

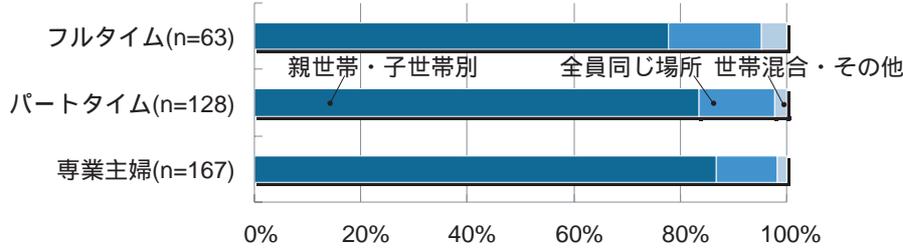


・子世帯の妻の就業状況別に見ると、娘夫婦同居の中でも子世帯妻がパートタイムの場合に食事や入浴の「場」の重なりが起きやすい傾向があります。娘夫婦同居の子世帯妻がフルタイムの場合には「世帯混合・その他(※)」が増え、平日は世帯の別にとられない場の使われ方が増えると考えられます。

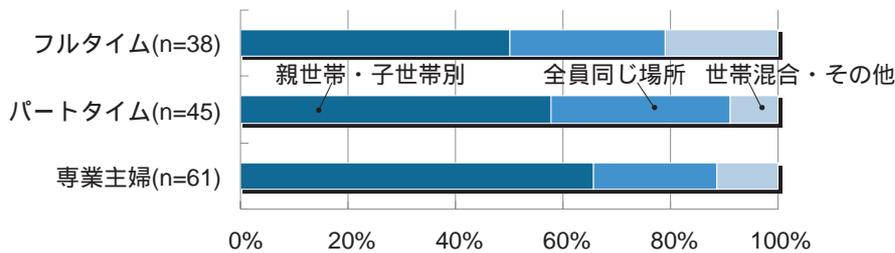
(※) 世帯混合・その他の例

・親世帯と子世帯の子どもが親世帯ダイニング、子世帯夫婦は子世帯ダイニングで食事をとる。子世帯の子どもと夫または妻は親世帯の浴室を使用する等。

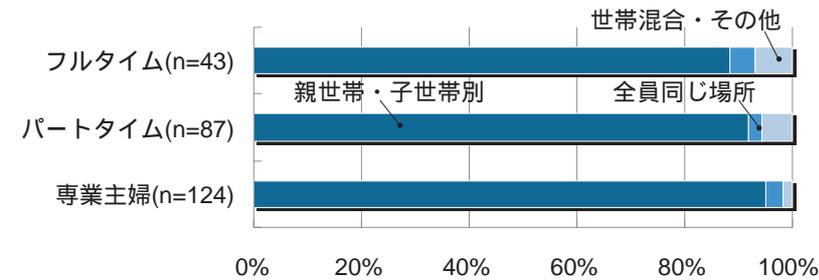
◆子世帯妻の就業状況と平日の夕食場所・息子夫婦同居（キッチン・ミニキッチンが2つ以上）



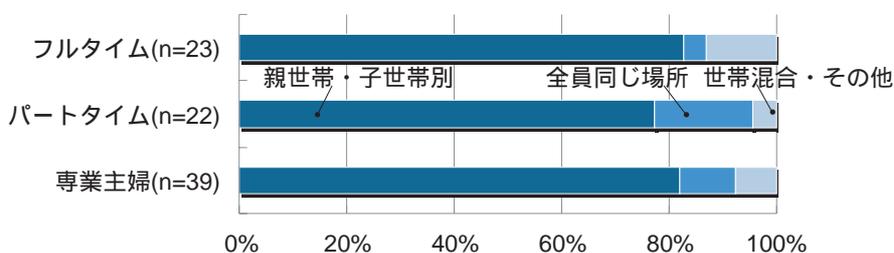
◆子世帯妻の就業状況と平日の夕食場所・娘夫婦同居（キッチン・ミニキッチンが2つ以上）



◆子世帯妻の就業状況と平日の入浴場所・息子夫婦同居（浴室が2つ以上）



◆子世帯妻の就業状況と平日の入浴場所・娘夫婦同居（浴室が2つ以上）



3) 息子・娘夫婦同居とエネルギー消費量

・今回の調査では、キッチン・ミニキッチンが2つ以上ある住宅に住む息子夫婦同居と娘夫婦同居において年間一次エネルギー消費量の違いは見られませんでした。
 ・娘夫婦同居では、全員同じ場所で食事する割合が多くみられましたが、同時に世帯混合・その他も多く、暮らしの「場」の重なりが二極化する傾向も1つの理由として考えられます。

■Ⅶ.二世帯同居家族の「場」の重なりとライフステージ変化

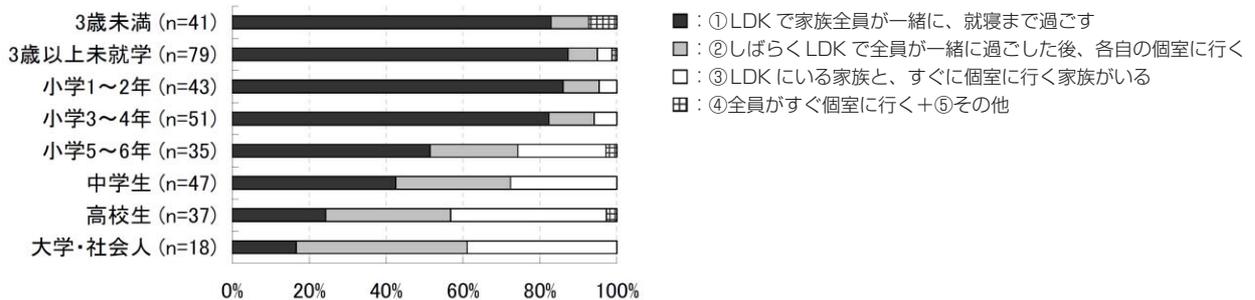
- ・キッチン・ミニキッチンが2つ以上ある二世帯同居家族の中で、夕食を同じダイニングでとる傾向は、子世帯の長子が小学生以下、大学生・社会人と片親同居のライフステージで増えます。
- ・二世帯住宅は、家族のライフステージによるさまざまな住まい方の変化を柔軟に受け入れる「場」を有する有効な提案と考えます。

1. 二世帯同居家族の食事場所に見るライフステージ変化の可能性

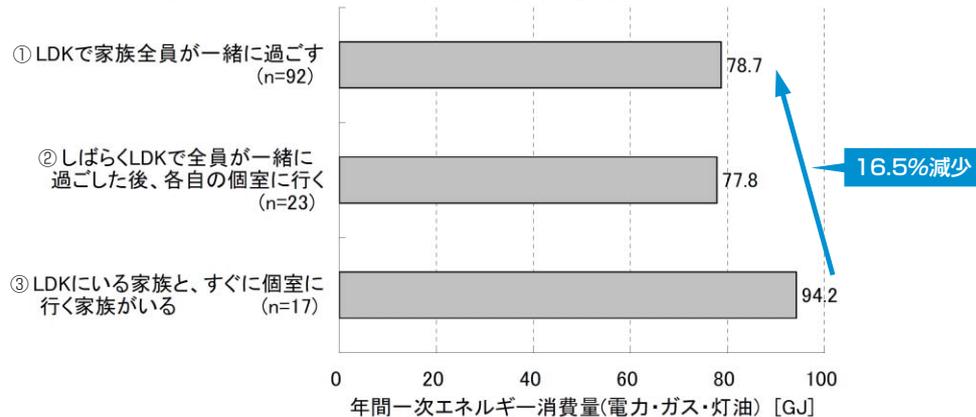
1) 単世帯家族の夕食後の過ごし方とライフステージ

・家族は、ライフステージにより、その「場」の重なりが変化していくものです。当研究所の行った単世帯調査でも、長子年齢により夕食後の過ごし方に变化があり、エネルギー消費との関係も見られました。

◆長子年齢別 夕食後の家族の過ごし方（単世帯調査（2008））



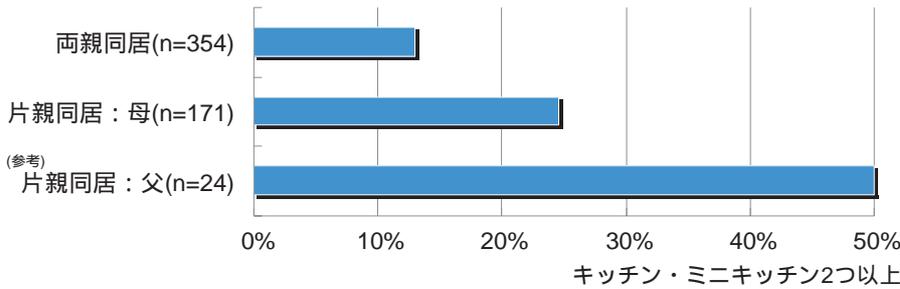
◆夕食後の過ごし方別年間一次エネルギー消費量平均（単世帯調査（2008））



2) 二世帯同居家族の食事場所とライフステージ

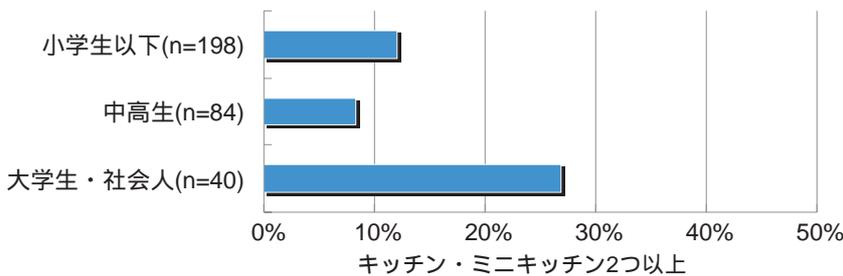
- ・同様に二世帯同居家族について、ライフステージと二世帯間の「場」の重なり関係を見てみます。ライフステージとしては、二世帯同居家族と関係の深い両親・片親同居パターンと長子学齢の変化を取り上げます。「場」の重なりとしては、二世帯間で起きやすい、食事の重なりについて着目します。
- ・キッチン・ミニキッチンが2つ以上に対象を絞ってみると、片親同居家族は24.5%と、両親同居家族より同じ場所で食事をとる傾向が見られます。

◆両親同居・片親同居と夕食を同じ場所でとる割合



- ・キッチン・ミニキッチンが2つ以上ある両親同居家族は、もともと夕食を同じ場所でとる傾向は小さいのですが、子世帯の長子学齢が小学生以下と大学生・社会人で夕食を同じ場所でとることが多くなる傾向が見られました。

◆子世帯の長子学齢と夕食を同じ場所でとる割合（両親同居家族の場合）



3) 二世帯同居家族の住宅プランに見る食事場所とライフステージ

- ・キッチン・ミニキッチンが2つ以上あるが、夕食を同じ場所でする家族のうち、特徴的な例を2つご紹介します。

■子世帯長子：未就学児・小学生期の例

- ・年間一次エネルギー消費量：106.0GJ
- ・両親同居
- ・娘夫婦同居
- ・同居家族6人
- ・子世帯長子：3才未満（子ども数1人）
- ・子世帯妻はフルタイム就業
- ・祖母同居あり

平日の夕食は親世帯キッチンを全員が利用
夕食は、親世帯と子世帯の子が一緒にとり、後で子世帯夫婦が親世帯の食堂で一緒にとる。
夕食後は、それぞれのLDKで就寝まで一緒に過ごす。

■子世帯長子：大学生期の例

- ・年間一次エネルギー消費量：105.8GJ
- ・片親（母）
- ・息子夫婦同居
- ・同居家族7人
- ・子世帯長子：大学生（子ども数4人）
- ・子世帯妻は専業主婦

平日の夕食は子世帯キッチンを全員が利用（1F）
夕食は親世帯と子世帯夫と一緒に、子世帯妻と子と一緒に子世帯の食堂でする。
夕食後しばらく子世帯LDKで全員がすごした後、各自の個室に行く。

2. 二世帯同居家族のライフステージ変化を受け入れる「場」を有する二世帯住宅

- ・前項の結果より、二世帯同居家族は、そのライフステージに応じて暮らしの「場」の重なりを変化させることにより、家族間の関係を、より柔軟に維持しようと考えます。
- ・二世帯住宅はこのようなライフステージ上に起こる暮らしの変化を受け入れ、家族をつなぎ、良い関係を保つために適した住宅と言えます。

1) 子世帯長子：未就学児・小学生期

- ・子世帯の子の未就学児・小学生期は、親世帯LDKを中心に生活する家族が増えます。この傾向は子世帯妻が就業している場合で特に顕著です。エネルギー消費量も長子未就学児期が最も小さくなる傾向にあります。

2) 子世帯長子：中高生期

- ・子世帯の子が中高生期は、子世帯の子どもの生活スケジュールが分散し、親世帯は自立して生活できる時期でもあるため、食事の「場」が分散します。

3) 親世帯高齢期（片親期）

- ・親世帯高齢期（片親期）では、食事は共用LDKまたは子世帯LDKで両世帯が一緒にとる割合が増える傾向があります。

3.二世帯同居家族の暮らし「独立と融合の程良いバランス」のための空間要件

・これまでの調査からわかってきたように、二世帯同居家族は、そのライフステージによって「場」の重ね方が変化する可能性があります。そのため、その変化を受け入れ、家族が自然に「場」を重ねることができるような空間の工夫が重要です。

1) キッチン、浴室は両世帯に

- ・キッチン・浴室は両世帯に設けることで、ライフステージ上に起こる二世帯の独立と融合の度合いに応じて上手に使い分けことができます。
- ・また、同一ライフステージにおいても平日と休日で独立と融合の度合いに応じて使うこともできるため、多様なライフスタイルを受け入れることができます。



2) 共用LDK + プライベートLDK

- ・二世帯の融合の度合いが高まっているライフステージでは、親世帯のLDKが家族全員の集まる場所となるケースが多くあります。
- ・共用LDKと、親世帯・子世帯それぞれのプライベートLDKが理想ですが、親世帯LDKを共用とする場合は、親世帯プライベート空間を充実させることがおすすめです。



3) 「孫共育」ゾーニング

- ・子世帯の子が乳幼児・小学生期のために、「孫共育」ゾーニングを。
- ・親世帯が頻繁に孫の部屋に入出入りできるように、親世帯スペースから直接行きやすい場所に孫の部屋をつくります。



4) 共用LDKに見える場・隠れる場による「別で一緒[®]」の実現

- ・子世帯の子が中高生期ライフステージのために、共用LDK(親世帯LDK)に見える場・隠れる場プランニングを。
- ・ある程度のこもり感がある空間で、それぞれが好きなことをしていても、一緒の気配を味わえます(別で一緒)。
- ・LDKに隠れ場がプランニングされていると、中高生期の子どもも夕食後にリビングで過ごす時間を持つ傾向があります。(くらしノベーショナル研究所調べ(2011))



5) プライベートLDKはファミリールームや来客空間

- ・世帯それぞれのLDKは、ファミリールームや来客空間として位置づけることで、協同の度合いが高まるライフステージでも、プライベートの時間を尊重することができます。



■Ⅳ.まとめ

- 1.二世帯同居家族は、単世帯の別居家族と比べて2～3割のエネルギー消費が削減されていることがわかりました。
- 2.親子同居家族には、様々な暮らしの「場」の重なり方があり、特に食事の場が重なることでエネルギー消費量が減少します。
- 3.二世帯住宅は、ライフステージにより変化する二世帯同居家族の暮らしの「場」の重なり方を受け入れることができる提案であり、その空間の工夫が重要と考えます。

1. 二世帯同居家族は年間に2～3割のエネルギー消費が削減される

・二世帯住宅のエネルギー消費が小さくなる理由

①建物が1つになることによる変化

②床面積減少による変化

③生活が近づくこと(=「場」の重なり増加)による変化 ← 本報告のテーマ

2. 親子同居家族のエネルギー消費量は「場」の重なりで減少

1) 食事の場を共用するとエネルギー消費量が減少

- ・暮らしの「場」の重なりが増えると、エネルギー消費量は削減されることがわかりました。その際、食事の場の共用による影響は大きく、浴室の影響は比較的小さいことがわかりました。
- ・重回帰分析を用い、親子同居家族のエネルギー消費に影響を与える要因を分析したところ、「延面積」「同居家族人数」「環境・省エネ行動」「両世帯の夕食の『場』の重なり」「最も遅い人の就寝時間」は有意な影響がある一方、「子世帯の長子年齢」「両世帯の入浴の『場』の重なり」は有意な影響がありませんでした。

2) 娘夫婦同居は世帯の別・一緒にこだわらない暮らしの「場」の重なりが多い。

- ・近年増加傾向の娘夫婦同居は、世帯毎に食事の場や浴室を分ける割合が息子夫婦同居と比べて少ない傾向が確認できました。親世帯・子世帯という単位にこだわらず、暮らしの協同の度合いに合わせて暮らしの「場」を選択していると言えます。特に娘夫婦同居の娘(子世帯妻)がフルタイム就業の時にその傾向が顕著に現れます。
- ・その結果とも言えますが、息子夫婦・娘夫婦同居の年間エネルギー消費量の違いは見られませんでした。娘夫婦同居では「全員一緒」も増える一方、平日は「世帯混合・その他」も増えることが、その原因と考えられます。



3. 二世帯同居家族のライフステージ変化を受け入れる「場」を有する二世帯住宅

- ・二世帯同居家族では、ライフステージにより、両世帯を交えて食事の場（LDKの使い方）が変化するケースがある可能性が確認されました。

1) 子世帯の子どもの学齢と親世帯年齢の変化で「場」の重なりも変わる

- ・二世帯同居家族では、子世帯の子どもの学齢による変化に加えて、親世帯年齢の変化の影響を受ける可能性を確認できました。

2) 二世帯同居家族の暮らしの「場」の変化に対応する鍵は、暮らしの独立と融合の程良いバランス

- ・暮らしの独立を原則にプランニングされた二世帯住宅は、子世帯の子ども学齢期、親世帯高齢期における融合の度合いが高まる時期にも柔軟に対応し、ライフステージによる暮らしの「場」の変化を受け入れることが可能です。
 - ・子世帯の子の中高生期には両世帯の分離度が高まる時期ですが、「別で一緒」を実現する見える場・隠れる場プランニングにより、一緒に過ごす時間を増やすようなLDKも提案することができます。
- ・親子同居は、親世帯家族と子世帯家族が持つ、多様な価値観とライフステージを経た変化を受け入れつつ、自然な両世帯の暮らしの「場」の重なりを生み出すことが大切と考えます。これからも、二世帯住宅のプランニングノウハウを活かし、より良いご提案に結びつけてまいります。



IX. 参考

1. 2007年単世帯調査の概要

1) 調査対象

- ・東京都、大阪府のヘーベルハウス居住者
- ・築1年以上（二世帯住宅を含まない）

2) 調査時期

- ・2007年10月

3) 調査方法

- ・Web調査

4) 有効回答

- ・全体 310件（有効回答率 2.4%）
うち、エネルギー使用量データあり 148件

5) 回答者属性

n = 310

居住地域	東京都：70.3% 大阪府：29.7%
回答者年代	30代：13.9% 40代：31.6% 50代：22.3% 60代以上：32.3%
同居家族人数	平均3.4人
子世帯の長子学齢	乳幼児：5.5% 小学生：12.3% 中高生：11.0% 大学生以上：35.5%
住宅延面積	平均148.6㎡
断熱仕様	旧基準相当：24.8% 新省エネ基準相当：75.2%

6) 2人世帯・4人世帯 対象者属性

n = 61

（エネルギー使用量データあり）

居住地域	2人世帯	東京都：62.1% 大阪府：37.9%
	4人世帯	東京都：68.7% 大阪府：31.3%
回答者年代	2人世帯	30代：10.3% 40代：10.3% 50代：6.9% 60代以上：72.5%
	4人世帯	30代：25.0% 40代：46.9% 50代：9.4% 60代以上：18.7%
住宅延面積	2人世帯	平均140.7㎡
	4人世帯	平均136.6㎡
断熱仕様	2人世帯	旧基準相当：37.9% 新省エネ基準相当：62.1%
	4人世帯	旧基準相当：16.1% 新省エネ基準相当：83.9%

2. 2012年単世帯調査の概要

1) 調査対象

- ・ 関東圏・中部圏・関西圏のヘーベルハウス居住者
- ・ 築1年～11年（二世帯住宅を含まない）

2) 調査時期

- ・ 第1回 2012年1月～2月
- ・ 第2回 2012年9月～10月

3) 調査方法

- ・ web調査と郵送調査を併用

4) 有効回答

- ・ 全体 226件（有効回答率 3.2%）
- うち、エネルギー使用量データあり 144件

5) 回答者属性

n = 226

居住地域	関東圏：75.2% 中部圏：19.9% 関西圏：4.9%
回答者年代（夫）	30代：22.1% 40代：34.7% 50代：16.2% 60代以上：26.1% 同居していない：0.9%
同居家族人数	平均3.3人
子世帯の長子学齢	未就学児：19.8% 小学生：29.6% 中高生：21.0% 大学生以上：29.6%
住宅延面積	平均120.6㎡
断熱仕様	新省エネ基準相当：23.0% 次世代省エネ基準相当：77.0%

6) 2人世帯・4人世帯 対象者属性

n = 94

（エネルギー使用量データあり）

		2人世帯	4人世帯
居住地域	関東圏	83.3%	86.6%
	中部圏	16.7%	9.6%
	関西圏	0.0%	3.8%
回答者年代（夫）	30代	17.5%	25.5%
	40代	7.5%	37.3%
	50代	10.0%	23.5%
	60代以上	60.0%	13.7%
	同居していない	5.0%	0.0%
住宅延面積		平均126.9㎡	平均118.6㎡
断熱仕様	新省エネ基準相当	23.8%	23.1%
	次世代省エネ基準相当	76.2%	76.9%

7) 2007年単世帯調査とのエネルギー消費量の比較

- ・ 2012年調査

単世帯／4人家族＋2人家族

$$4人家族 + 2人家族 = 1.8$$

- ・ 2007年調査

単世帯／4人家族＋2人家族

$$4人家族 + 2人家族 = 1.9$$



くらしノバージョン研究所

暮らしの「場」を重ねる二世帯同居と
エネルギー消費の関係 調査報告書

発 行 2013年1月24日
発行所 旭化成ホームズ株式会社
文 責 くらしノバージョン研究所
主幹研究員 下川 美代子